

日本音楽学会 2024 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）
シンポジウム「演奏を読む：演奏解析ツールと演奏解析によるテンポ・ルバートの実践分析」
傍聴記

神保 夏子

2024 年 12 月 8 日、大阪大学中之島センター・中之島スタジオにおいて、鷺野彰子氏（福岡県立大学）らの科研費研究プロジェクト「20 世紀前半の歴史的演奏とピアノロールの演奏解析によるルバート奏法分析」の一環をなすシンポジウム「演奏を読む：演奏解析ツールと演奏解析によるテンポ・ルバートの実践分析」が開催された。

演奏解析（分析）とは、音楽学分野においては比較的新興の領域であるパフォーマンス・スタディーズの一部として、1990 年前後以降——とりわけ英国の主要大学を中心に大型の研究プロジェクトが組まれた 2000 年代以降——盛んに行われるようになってきたものである。この 20 年ほどの間に、オーディオ・音楽分析用ソフトウェアを活用した演奏データの定量分析や、Nicholas Cook が“close listening”と呼んだ「コンピュータの補助による聴取」（Cook 2013, 5）に基づく演奏解析が方法論としてすっかり定着したが、その背景には、解析対象となる歴史的録音やピアノロールなどの資料の整備とともに、解析の手法やツールの開発にかかわる理系分野の研究者との共同研究の蓄積があった。本シンポジウムもまたこうした領域横断の路線をとるものであり、演奏解析に携わる音楽学者とその解析のためのツールの開発に従事する情報学系の研究者とが一堂に会して発表・議論を行うという、大変貴重な機会となった。

上述の学際性とともに一定の国際性が意図されていたことも、本シンポジウムの一つの特徴である。登壇が予告されていた発表者のうち、ショパンのマズルカにおけるルバートの事例を発表予定であったスタンフォード大学の Craig Stuart Sapp 氏は体調不良のため残念ながら欠席であったが、リッチモンド大学の Yucong Jiang 氏は米国から Zoom で参加され、ディスカッションにも積極的に加わっておられた。発表での使用言語は英語が 4 件、日本語が 4 件とちょうど半々にわかれ、配布された冊子や日本語発表の PowerPoint は二か国語併記となっていた。対面での参加者の大半が日本語話者であったため、司会進行（鷺野氏と伊東信宏氏 [大阪大学]）やディスカッション時のコメントの多くは日本語で行われたが、コミュニケーションの補助として、VoicePing という音声翻訳アプリの導入が試みられていたことは特筆に値するだろう。

シンポジウムは 3 部構成で、数回の休憩を含めて約 6 時間に及ぶ充実したものであった。以下にその概要を簡略に記すが、執筆者の専門柄、あくまで音楽学視点での記述となることをお断りしておく。

研究代表者の鷺野氏からの趣旨説明を経て、第 1 部では演奏解析ツールの開発等に携わってきた 4 名（欠席の Sapp 氏を除く）の研究者による発表が行われた。トップバッターの Yucong Jiang 氏が紹介されたのは、自身が開発した最新のソフトウェア、Performance Precision の主な機能である（“Performance Precision: Computer-assisted Annotation and Analysis of Music Performance”）。従

来、演奏解析はコンピュータの画面上に表示された波形などのデータを手元の楽譜と見比べながら行われることが多く、両者の対応箇所を正確に突き合わせるのに煩雑な確認作業を必要とした。このソフトウェアの主要な特色は、ある演奏の音声ファイルの波形とこれに対応するコンピュータ上の楽譜のデータが自動的に紐づけられ、楽譜上の任意の箇所を選択すると、まさにその箇所から演奏を再生することができるという点である。同一画面上で楽譜を見ながら直観的な操作を行うことが可能になるため、解析作業の労力がかなり軽減されることになる。

つづいての印藤海翔氏（九州工業大学）の発表（「演奏速度のずれを活用したピアノ演奏の比較分析補助ツールの開発」）は、鷲野氏らのプロジェクトのためのツール開発に携わった情報工学系のメンバーを代表しての報告で、複数の演奏を比較分析する際の補助手段として、演奏におけるミクロ・マクロの特徴を色付けによって視覚的に把握しやすくするという機能の紹介などが行われた。このツールの大元となるシステムの開発者であるという中村栄太氏（九州大学）の発表

（“Automatic transcription and alignment for analyzing piano performance”）は、楽譜データ・MIDI 演奏データ・音響データという三種類の音楽データ間の相互参照の問題を中心とする、解析ツールの仕組みの部分の解説にウェイトをおくものであった。中村氏によれば、ユーザー側が求めていた楽譜データと音響データの直接的な相互参照には情報処理技術上困難な点があったため、ここでは音響データから MIDI データへ、MIDI データから楽譜データへという 2 段階でのトランスクリプションが行われているとのことであった。発表のなかでは音響データから中間の MIDI データへと転写された演奏のデモンストレーションが行われたが、オリジナルの演奏（ここでは 2021 年のショパン・コンクールの入賞者である反田恭平氏とブルース・リウ氏によるもの）の特徴の再現度は驚くほどのものであった。

最後の奥村健太氏（名古屋国際工科専門職大学）の発表（“Statistical techniques for modeling individual-dependent features in music performance”）は、楽譜の指示の解釈にもとづき演奏者の暗黙知によって付与される「表情」がどのように形作られているのかを、形式知として統計学的にモデル化する手法を提案するものであった。ここまでの発表はすべて鍵盤楽器を前提としたものであったが、奥村氏は研究成果を別の楽器の演奏にも拡張する試みについても触れられており、とりわけアマチュアの音楽実践のサポートなどの応用可能性を重点的にとらえておられたことが印象的であった。

第 2 部では、音楽学を専門とする 4 名の発表者によって、具体的な演奏事例に基づくテンポ・ルバートの分析と考察が行われた。高橋舞氏の発表「演奏の形成における流派の役割：バッハの《半音階的幻想曲とフーガ》を事例として」は、同一楽曲の多数の演奏録音データの分析を通じて演奏の構成要素と演奏者の属する「流派」との相関を幾つかの異なるレベルで考察するもので、流派の影響はテンポ変化等から抽出される演奏様式よりはむしろ特定の「奏法」（演奏習慣）に反映されているという指摘が興味深かった。

つづく 2 件の発表では、ショパン演奏におけるテンポ・ルバートという共通の問題をめぐって、ショパンの伝統を引き継ぐとされる 20 世紀初頭のピアニストの演奏事例が取り上げられた。上田泰史氏の発表「ショパンらしさの構築：C. サン＝サーンスと R. プーニョによるテンポ・ルバート

実践」は、ルバート奏法のなかでも特に左右の手のずれという現象に焦点をあてたもので、二人のピアニストによる《ノクターン》op.15-2 の一見異なる演奏に共通の表現戦略が見て取れるとの見解が示された。一方、本プロジェクトの代表である鷺野彰子氏の「フランシス・プランテの演奏に具現化されたショパンのテンポ・ルバート」では、《アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ》の冒頭を例に、演奏テンポのマイクロなゆらぎの様態そのものが分析と考察の対象となった。両氏の演奏解析においては、録音ではなく MIDI に変換されたピアノロールの記録情報を使用しているとのことで、解析手法や資料についての紹介も興味深いものだった。

最後のヘルマン・ゴチェフスキ氏の発表（“Time Structure in Performances with Ambiguous Beats: Focusing on Bars 12 to 18 in Reger’s own Performance of his Humoresque op. 20/5 in G minor (Welte Mignon roll no. 1017, recorded on December 8th, 1905)”）では、マックス・レーガーの自作自演にみられる楽譜からの逸脱の問題が扱われ、発表者自身が考案したグラフ記述システム（SKYLINE2）を通じて、演奏上の複雑なリズムやテンポの変化をレーガー自身の記譜よりも合理的に解釈・表奏する方法が提示された。西洋音楽の演奏解析は一般に楽譜（五線譜）との照合のもとに行われることが多いが、演奏者自身が長期にわたって演奏を繰り返す中で独自の演奏パターンを確立していったとみられるこのレーガーの場合のように、演奏を楽譜の情報の音響化ととらえる素朴な前提自体を疑うべき場合もあるという点において示唆的な事例であった。

第3部では第1部・第2部の発表者を中心に、フロアを交えて活発な議論が展開された。第2部までの発表に関連する補足のコメントのほか、それぞれの分野の研究状況に関する一般的な質問が見られた。また、システム開発に携わる側の方々からは、実際に演奏解析を行うユーザー側のニーズについての質問も投げかけられた。一方、ディスカッションの中では、発言者のそれぞれが依って立つ学問分野の違いによってそもそもの研究動機や関心の方向性に大きな違いがあることが浮かび上がるような場面もあった。たとえば、現在・未来の音楽現場への還元を研究上の大きなモチベーションとするタイプの研究／開発者にとっては、音楽史系の研究者が取り組んでいるような歴史的過去の演奏の解析の意義やその前提がいまひとつ理解しがたい、といったようなことである。一連のやりとりからは、領域横断的な共同研究の意義ばかりではなく、分野を越えた研究者間の相互理解の難しさについても考えさせられるものがあった。もっとも、そうした根源的な問題があるからこそ、このようなシンポジウムが情報・意見交換の場として重要な意味をもつことになったともいえる。

本傍聴記の執筆者が演奏関連の博士論文を執筆していた2010年代には、演奏解析は日本の音楽学業界ではいまだ十分な市民権を得ていない領域という感が強かった。本シンポジウムが象徴するように、近年この種の研究が日本国内でも個人のレベルを超えて行われ、いくつかの重要な研究成果が発表されてきたのは大変喜ばしいことである。プロジェクトの今後のさらなる進展に期待したい。

引用文献

Cook, Nicholas. 2013. *Beyond the Score: Music as Performance*. New York: Oxford University Press.